

第二の『興味の準備』といふことは、餘り更めて説いて居る人もない様ですけど、私は豫て意志養成に極めて大切なことに考へて居ります。殊に近世の忙しい生活は一寸した思ひつきや、一寸した刺戟に動かされて事をする場合が多くなつて充分内に熟した自分の興味によつてするといふ類のことは、次第に減じて來勝ちなので、此の近世の落付きのない生活の一つの弊に對しても、此の點は幼時からよく養ひ度いと思つて居るのです。それを此の子供に適用せられたのは實に愉快なことです。更に此の子供の場合から出發して、一般的に、此の問題を一層詳しく御研究になつたら如何でせう。どうしたら、興味の内に完熟する迄的發表を自然的に抑えて居られる様になるか、之れは充分御研究になる價値がある有益なことゝ信じます。

▼優れたるにつけ、劣れるにつけ、又は或る點に就て特殊な個性性癖を有せるにつけ、保育上苦心せられた幼児についての御經驗談をお送り下さい。▲

本誌の新しい表紙の圖案は東京女子高等師範學校教授岡田秀氏の、又題字は同講師岡田起作氏の御好意によつたものであります。

お正月

△ △ △

○お正月が來た。子供の喜ぶお正月が來た。子供の喜ぶことなら、年が年中でもいゝ。況んや一年一度のお正月だ。いくらでも子供を喜ばせてやり度い。

○五つの節句、舶來のクリスマス、其の他一日位づゝの子供の日は他にも無いでもないが、暮の煤掃、餅つきから待ち構へて、少くも松の内五日七草七日といふ、連續した自分達の世界を此の地上に實現し得るのは、子供達にとつてお正月だけだ。新しい着物を着せて貰へる。男の子には紙鳶、獨樂、女の子には羽子板、手鞠が買つて貰へる。夜の遊び時間の制限も常よりは多少おゆるしが出て、加留多が與へられる。雙六が與へられる。かけ物の蜜柑やお煎餅が澤山に積み上げられる。世界は何といふ面白い處なのだらう。

○それよりも尙ほ子供にとつて嬉しいことは、世界中が彼等の爲に、にこ／＼して居て呉れることだ。お父さまやお母さまは言ふまでもないこと、ふだんは恐い顔ばかりして居る伯父さんまで、遠くの方からにこ／＼しながら来て、『坊やは幾つになつた』などと、珍らしく優しい聲を出して頭を撫でて呉れる。そして萬事が寛大で柔和で、人が皆子供の愉快の爲に熱心になつて呉れる。平生は何の彼のと相手になつて呉れないもの迄が、向ふから進んで遊び相手になりに来る。子供の顔を見ると、何故遊んで許り居るのかと口癖の様に言つて居る人でも、お正月に限つては、遊べ遊べ、何故もつと遊ばないのかといふ様に言つて呉れる。實にお正月は世界中の兒童觀を變へるといつてもよい。何といふ幸福なことなのだらう。

○お正月を斯ういふ様に子供の日とし、子供を喜ばす日と定めた昔の人は、何といふ偉い人なのであらう。そして、それを年々につけて廢しない

風習は、何といふ良い風習なのであらう。お正月はいつ迄もお正月であり度い。そして、愈々益々子供のお正月であり度い。年中自分達の忙しさに追はれて碌々子供の遊び相手になつてやれない世界が、年の始めの七日、十日を子供の遊び相手になつてやるのは、成人の方から言つてもよく出来て居ることだ。一年中お正月の様にしてやつたら子供はどんなに喜ぶことか知れないが、せめてはお正月だけなり、子供の喜びの爲の世界を作つてやり度いものだ。

○子供達よ、さあ一しよに遊ぼう。風が吹いて来た。紙鳶を持つてやるから早く馳けるがい。羽子が軒にかゝつたか。よし／＼幾度でも取つてやるから、いくらでも高くつけ。加留多の読み手か、よし／＼読んでやるぞ。雙六の仲間か、それもよし。今日は公園か、明日は町か。よし／＼何處へでも連れて行つてやる。お正月はお前達といつしよに遊ぶためのお休み日なのだ。